

氏名（本籍） ^{おか} 岡 ^だ 田 ^{あきら} 明（神奈川県）

学位の種類 教育学博士

学位記番号 博乙第16号

学位授与年月日 昭和54年10月31日

学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当

審査研究科 心身障害学研究科

学位論文題目 弱視児の読みに関する実証的研究

主査 筑波大学教授 佐藤泰正

副査 筑波大学教授 三沢義一

副査 筑波大学教授 教育学博士 福沢周亮

副査 筑波大学教授 湊吉正

論文の要旨

本研究は主として、認知、意味把握、読みの反応を重視するグレイ・モデルにもとづき、弱視児の読みの特質を多面的に明らかにし、その結果にもとづき、弱視児の読みの改善に関する若干の知見を得ることを目的としている。

研究方法としては主として音読法を使用し、その速度と誤りの種類（反復、援助、添加、誤読、省略）の二つの面から考察した。音読法のほかに黙読法も一部使用した。それらの方法によって得られたデータは、多変量解析などにより分析された。被験者は小学生と中学生で、弱視児群の視力は0.3未満（両眼での矯正視力）である。

研究はつぎの5章から成っている。すなわち、(1)弱視児の音読に関する実験的検討、(2)弱視児の文字の認知と学習に関する実験的検討、(3)弱視児の読みの柔軟性に関する実験的検討、(4)弱視児の読書反応の分析、(5)弱視児の読みの個人差の分析、である。

まず第1章の弱視児の音読に関する実験的研究では、はじめに、どのような読書材が弱視児にとって最適であるかを調べるため、可視性ならびに可読性要因の弱視児の音読に及ぼす影響を調べた。結果は活字の大きさ、行の長さ、書体、文字と紙の色の対比、漢字含有率、分ち書きで読みが影響されることが明らかになった。具体的には、活字は拡大しなければよく認知できないが、拡大しすぎると読みの効率を落とすこと、行の長さは、短い方が効率がよいこと、ゴシック体は文章の読みでは効率を落とすこと、紙の背景が青や黒のとき読みの効率が上がること、漢字含有率が低いほ

ど読みの効率があがること、分ち書きが有効なことなどが明らかにされた。

つぎに、弱視児の音読に関する実験結果から、弱視児の読速度は正眼児に比べて遅いこと、音読の誤りと読速度との間には常に有意な逆相関があることが明らかにされた。音読の誤りの因子分析では、非独立の読み、付加性の読み、誤りの読み、困難な読みの4因子が抽出された。

弱視児の読みが正眼児に比して有意に劣っているので、つぎに、弱視児の読みの改善のための実験をおこなった。二つの実験がおこなわれたが、一つは動機づけを利用する方法（時間をはかって読ませる方法）を、もう一つはクローズ法を適用した予測制御による方法である。動機づけによる方法では、3回目にその効果が現われ、読速度が向上しているが、11回目からは高原状態を示した。予測制御による実験では、読書材の困難度を落とすと、読速度は有意に増加した。音読中の“援助”を有意に減少させることができたが、“反復”は、減少させることができなかった。

第2章は、弱視児における認知と学習に関する実験である。まず、文字の認知について抹消テストによって調べたところ、正眼児群との間に、は一ほ、る一ろ、め一お、あ一おについての混同で有意差が見られ、誤りの因子分析では、脱落、一部の差異の混同、反転錯誤、全体的に似た文字の混同の4因子を抽出した。

漢字の読みの学習に関する実験では、弱視児に、対連合学習の効果が見られた。また、漢字の画数は少ない方がよく学習がおこなわれる傾向があった。しかし象形文字の添加は学習を促進しなかった。

第3章は、弱視児における読みの柔軟性に関する実験であるが、30秒間に読む文字数を手掛りにして読書中の柔軟性を調べたところ、正眼児に比して弱視児は読みの柔軟性が有意に少なく、また、読書材の種類に対応した読みの柔軟性についても弱視児が有意に少なかった。

第4章は、グレイ・モデルで重視されている弱視児の読書反応を感想文を通して調べたものである。感想を表現、場面、場面、すじ、主題に分けてみると、弱視児は正眼児に比して場面についての感想がかなり多く、主題についての感想が少なかった。

第5章は弱視児の読みの個人差の分析であり、個人内変動と個人間変動の分析に分かれる。個人内変動では、認の認知、文の理解、語の用法、節の理解、同類発見、漢字の読みが相対的に、弱視児の読書力の中で劣っていた。クラスター・アナリシスでは、20人中7人の弱視児だけが、1群をなしたが、どのクラスターにも入らない弱視児も多かった。クラスター・アナリシスの安定性は、Q技法による因子分析でも検討したが、ほぼ同じ傾向を示した。

個人間変動の分析のために、弱視児の読書力に関する調査結果を正眼児と比べてみたところ、国語力テストでは、漢字の読み、かなづかい、送りがな、ローマ字、ことばの意味、主語、読解力、文章の誤りの訂正、詩、短歌、俳句、ことわざ、手紙文、辞典の知識で弱視児群が有意に劣っていた。しかし“へん”の知識では有意に弱視児群がすぐれていた。読解力テストでは、困難な読書材の読解で、弱視児群が有意に劣っていたが、困難度を落とすと、両群間に差はなくなった。

さらにこれらの個人間変動を重相関比法で分析した。すなわち、データ行列をつくり、重みベクトルを用いて合成変量をつくった。その合成変量が、弱視児群と正眼児群を分類するかどうかを検

討した。結果はデータ行列に重みベクトルをかけ合わせて構成した合成変量が2群を明確に分類していた。つまり、弱視児群が、読書力で劣ることがはっきりとしたわけである。

審 査 の 要 旨

本研究は読みの研究者である筆者が、弱視児の読みについて多年にわたって研究をつみ重ねてきたものである。弱視児にとって、読みが重要な役割をはたしているにもかかわらず、その研究は、国の内外をとわず、きわめて少ない。そうした中で、多年にわたる筆者の研究は、視覚障害児教育のための貴重な資料を提供するものである。

被験者の問題、結果の整理、などにおいて、なお問題がないでもないが、数少ないこの分野の研究の中で、先駆的研究としての意義は大きく、今後の研究にも多くの示唆を与えることであろう。本研究は、視覚障害児教育に貢献するところ大なるものがある。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。